

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊34年目 **Nr. 399**

2023年4月号



Hendrick Goltzius Selbstbildnis, um 1593–1595 Schwarze und farbige Kreide, Aquarell, Pinsel in Grau und Weiß, auf Papier Albertina, Wien

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

132

日本原子力学会の「二〇二三年春の年会」が三月一三、一五、東京大学駒場キャンパス(東京都目黒区)で開催された。同学会では毎年、春と秋にそれぞれ年会、大会として研究発表の場を設けているが、「春の年会」の対面での開催は四年ぶり。今回の年会では、三日間で約一五〇件のセッションが設けられ、同学会の専門委員会・ネットワークなどが活動成果を報告し、来場者を変え意見交換を行った。

初日の一三日に行われた「原子力に関わる人文・社会科学の総合知問題」研究専門委員会と社会環境部会との合同セッションでは、風評被害の問題をテーマに議論。同専門委員会は、福島第一原子力発電所で発生するALPS処理水の取扱いを巡り顕在化してきた原子力の風評被害の問題をどう社会的課題の解決に向け分野を横断した「総合知」を活用する必要性から、二〇二二年四月に設置された。同セッションでは、土田昭司氏(関西大学社会学部教授、座長、佐



「社会学の視点から原子力の風評被害の問題に取り組む 関西大・土田氏 (写真は2021年の文科省主催シンポにて)」
<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/16867.html>

田務氏(日本原子力研究開発機構広報部、寿楽浩太氏(東京電機大学工学部教授、関谷直也氏(東京大学大学院情報学環准教授、基調講演)が登壇。これまでの検討状況を発表するとともに、一般来場者も交え総合討論を行った。

JCO臨界事故(一九九九年)を契機に社会心理学の立場から原子力の風評被害の問題に関わってきたという関谷氏は、いわゆる「うわさ話」に関して、流言、都市伝説、「ゴシップ」、デマ、ステイグマ(差別・偏見)、パニックなどに分類。最近の「件」(くだん、「人面牛」の様相をした妖怪で絵図を掲げることで厄除けになるといわれている)に関する都市伝説にも言及した。風評被害については、過去の事例分析から「本来、安全とされる食品、商品、土地、企業などを人々が危険視し、消費や観光を忌避することによって引き起こされる経済的被害」と定義。同氏は「うわさは関心の強い人や不安を感じる人の間で流れるが、風評被害はどちらかといえば関心の低い人の間で引き起こされる現象。両者を区別して考える必要がある」と指摘した。水産物の風評影響については、第五福竜丸の被

爆(五四年)、原子力船「むつ」の放射線漏れ(七四年)、敦賀発電所の放射性物質漏えい(八一年)にさかのぼり、賠償・訴訟の歴史を説明。福島第一原子力発電所事故後、設定された食品中の放射性物質に関する基準値に対する人々の見方にも触れた上で、関谷氏は、風評の原因・対応の難しさとして報道や流通に係る問題をあげ、「物理的な正しさだけでなく、心理的な納得にも向かい合わねばならない」と述べた。

総合討論に移り、流通の問題について、地層処分以外の側面に関する研究にも取り組む寿楽氏は、「被災地以外の産地に移っていく消費者の購買志向をくい止めるのはなかなか難しい」などと、産業構造上の課題を示唆。一般来場者からは、埼玉県所沢市を中心としたダイオキシン騒動にも鑑み、いわゆる「風評加害」を危惧する意見もあり、原子力分野の報道対応に長く携わる佐田氏は、インターネットを通じた情報拡散に問題意識を示したほか、「安全・危険の尺度」が人によって異なること、政治への不信感が背景にあるなど指摘した。今回の年会では、原子力分野のジェンダー・フランスGX(グリーン・トランスフォーメーション)実現に向けたアカデミアの役割に関するセッションも設けられている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に関係する偉大な神経学者(その二)を紹介したい。一九〇五年にウィーンに生まれたヴィクトル・フランクルは、ウィーン大学在学中よりアドラー・フロイトに師事し、精神医学を学ぶ。ウィーン大学医学部精神科教授、ウィーン市立病院神経科部長を兼任する。「第三ウィーン学派」として、また独自の「実存分析」を唱え、ドイツ語圏では元々知られていた。フランクルの理論には「シェーラーの影響が濃く、ハイデッガーの体系を汲む。精神科医として有名であるが、脳外科医としての腕前も一級であった。三三年から、ウィーンの内科学で女性の自殺患者部門の責任者を務めていたが、三八年、ナチスによるドイツのオーストリア併合で、ユダヤ人がドイツ人を治療することが禁じられ、解任された。四二年二月に結婚したが、その九月後に家族と共に強制収容所のテレージエンシュタットに収容され、父はここで死亡。母と妻は別の収容所に移されて死亡した。フランクルは四四年十月にアウシュビッツに送られたが、三日後にテュルクハイムに移送され、四五年四月にアメリカ軍により解放された。その後四六年にウィーンの神経科病院に呼ばれ、七一年まで勤務した。ナチス強制収容所での体験を元にした『夜と霧』は、日本語を含め一七ヶ国語に翻訳され、現在も読み継がれている。発行部数は英語版だけでも累計九百万部に及び、九一年の米国国会図書館の調査で「私の人生に最も影響を与えた本」のベストテンに入った。読売新聞による二〇〇〇年の「読者の二一世紀に伝えるあの一冊」のアンケート調査では、翻訳・コメント部門第三位となった。極限的な体験を経て生き残った人であるが、ユ一

モアとウィットを愛する快活な人柄であったという。一方、一九四二年に岐阜県大垣市に生まれた中西重忠教授は、県立大垣北高等学校を卒業後、六六年に京都大学医学部を卒業した。本庶佑教授とは同期だった。七一年同大学院医学研究科博士課程を終え、米国国立衛生研究所客員研究員を経て、七四年京都大学医学部医化学教室助教に採用され、八一年同医学部免疫研究施設第二部門教授に就任。九九年より同大学院生命科学研究所情報学講座教授も併任し、二〇〇〇年から二年間同大学院医学研究科長、医学部長を務めた。中西教授は、分子神経科学の研究を展開し、脳神経系の情報伝達と脳機能の発現の制御機構に関して画期的な成果を挙げた。種々の活性ペプチドの前駆体の構造と制御機構を明らかにし、さらに解析が困難であった受容体およびイオン・チャンネルの遺伝子の新しい単離法を開発し、神経ペプチドおよび興奮性神経伝達物質グルタミン酸の受容体の遺伝子群とこれら受容体の脳機能における役割を明らかにした。また、特定の神経回路の伝達機構を個体レベルで解析出来る新しい手法を開発。これらの先駆的研究によって記憶、学習や視覚嗅覚系の情報伝達の基本的な機構を明らかにした。中西教授の研究業績は、独自の手法の開発のもとに神経情報の基本原理を明らかにしたものであり、医学、生命科学の発展に大きく貢献した。一連の研究に対して、米国フリズトルマイヤー・ズ・スクイブ神経科学賞、慶應医学賞、恩賜賞、日本学士院賞、米国グロバー神経科学賞ほか多数の賞が授与され、一五年には文化勲章が授与された。中西教授は若手に対して「一人の才能はそれぞれ違うものだから、自分はどういう才能があるか常に考えなさい」と良く話されていたと言っ

余談であるが、フランクルの『夜と霧』は三十代後半に読んだ。強制収容所の過酷な生活の中で、夕焼けの美しさに感動出来た者だけが生き残った、との話は忘れられない。中西教授の言葉は将来のある若者にとって意義が深いと思う。今月も両市に関連する偉大な神経学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン大学が所蔵するフランクルの写真掲載させていただく。



■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■



ウィーン9区にあるヴィクトール・フランクル・センター Viktor Frankl Zentrum Wien 博物館 © A.T.Bitzan